

『山の郵便配達』

1999年／中国／霍建起（フォ・ジェンチー）監督作品

仕事の心得も懐かしくなる景色も余韻も得られる

会員 横塚 章 (37期)

父の仕事を見て

120キロの山道を2泊3日、重い郵便物を背負い、徒歩で山の間の村や集落に郵便の集配をする。自分の仕事に誇りを持ち、過酷な郵便配達の仕事を経験してきた父が、足を痛めたため退職することとなる。その仕事を息子に引き継がせるために、息子や愛犬「次男坊」と共に最後の仕事へと出発する。

帰って来た翌朝には出かけるのだから、自宅にいないのは当然。もともと無口でなじめなかった父親を、「父さん」と呼ばなかった息子が、親の仕事に対する真摯さや、人々との交わりを目の当たりにし、心を通わせていく。歓待されるのかと思った村に誰も人がおらず、歩き出して人が集まっているのに気がつく（あり得ない）とか、息子が父親を背負って川を渡り、最後は心を通わせるなど、淡々とした中にある山場は、小学校の時の文部省指定映画のようなものだけれど。

愚痴は言わず着実に仕事をするこそ誇り

見返してもついで、何が起こるかと思構えてしまうが何も無い。考えてみれば、年に100回以上何十年と同じ道を歩いているのだし、父親は背負っている郵便物を無事に各地に集配することを何よりの使命と、慎重に事を運ぶように諭している。危険があること自体が論外で、そう考えれば何も無いのが当然。

たぶん2000年頃に見ているので、弁護士になって15年目くらいだったはずで、父の「言っておくが愚痴はこぼすな」、子の「道が悪いね」に、「いい道

もある」と返すなど、当時元ボス弁としていた暗黙の会話と同じだったようにも思うが、そこまで考え見えていたかどうか。

なつかしいと思う景色

中国とは思えない意外と優しい山並み、踏み固められた山道、河を渡った先の水車（どうしてあるのか？）、緩い段々畑、曲線の畦が美しい水田、斜面に張りついて建っている家と水路のある歩道、広い山裾の美しい景色、紙飛行機、そして、きらきらとたくさんのたくさんのトンボが舞っている谷間の風景。この映画は、この景色と、黙々と歩く親子、そして、唯一名前のある犬の「次男坊」で、暖かくいつまでも心に残る。村落の田の中を歩く二人の前で、稲の上にちょっと揺れているしっぽの存在感はまさに名優。何しろ、映画は息子への信頼を語る次男坊の演技で終わるのだから。

親しくなる宿泊場所の山の部族の魅力的な女性について、父親に言う一言が、母親への深い愛情を感じさせ、息子の恋愛やその後どういった生活をしていくことになるのかとも思わせる。文化大革命終焉間もない1980年初頭の湖南省西部のことらしいが、当時の共産党支配の現実も垣間見え、歩く道が広すぎるとしたら、眼下を走るバスが見える場所もある。懐かしさを感じる映像は、日本でもわずかにしか残らない失われた風景と、人々の心が見えるからだろう。今でもこういった仕事や風景はあるのだろうか。すさんだ映像しか見えてこない今の隣国が残念である。